

(独立行政法人教員研修センター委嘱事業)

教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

報 告 書

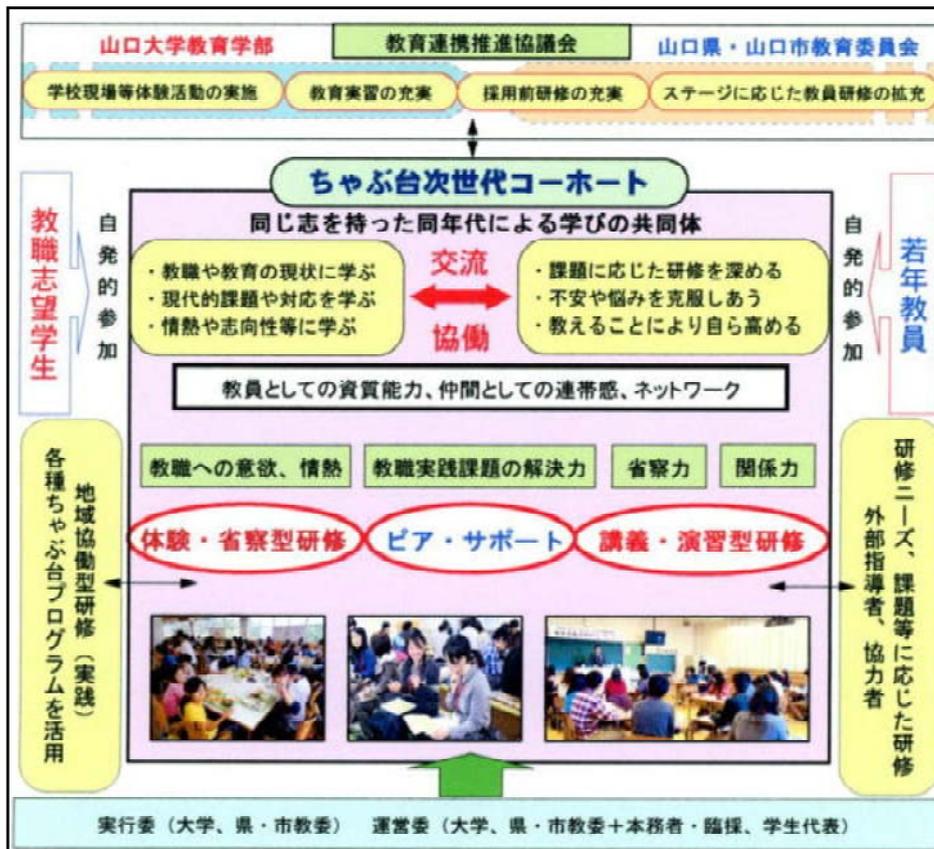
プログラム名	「若年教員」と「教職志望学生」が「ちゃぶ台」方式でつくる協働型教員研修モデル（Ⅱ）
プログラムの特徴	<ul style="list-style-type: none">・ 本プログラムは「平成21年度教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」（「若年教員」と「教職志望学生」が「ちゃぶ台」方式でつくる協働型教員研修モデル）の第2年次プログラムとして、第1年次の成果と課題をふまえ、若年教員と教職志望学生が求める研修内容と適する形態、教委主催研修との差別化や相互補完のあり方、主体性と居心地良さを伴う同世代の教員研修モデルを具体的に提案するものである。・ 本プログラムは、経験の浅い「若年教員」と「教職志望学生」が、相互研修組織を形成し、大学教員や教育委員会関係者等との協働のもとで、日々の現場実践、教育実習、教職実践体験等の共有と省察、教えあいや学びあい等を通じて、教員としての資質能力の深化、教職実践課題の解決力、省察力の醸成を図る教員研修モデルを開発し提案するものである。・ 本プログラムは、連携三者による「教育連携推進協議会」のもと、「実行委員会」、「運営委員会」を立て組織的に進めることをとおして、大学と教育委員会のより緊密な連携をめざし、教員養成・採用・研修の一体化をふまえた教員研修モデルを具体的に提案するものである。

平成23年3月

山口大学 山口県教育委員会 山口市教育委員会

プログラムの全体概要

- 本プログラムは、山口大学と山口県教育委員会・山口市教育委員会が連携し、教職経験の浅い「若年教員（本務者）」「同（臨時的任用教員）」と「教職志望学生」による協働型研修組織「ちゃぶ台次世代コーホート」を設立し、学校現場での教育実践、教育実習や教職実践体験等の共有と省察、教えあい・学びあい等をさせることをとおして、教員としての資質能力の深化や教職実践課題を省察し解決する力の向上等を図る教員研修モデルプログラムである。
- 本プログラムでは、大学と県教委・市教委の連携による教員の養成・採用・研修の一体化の視点を重視し、既存の「教育連携推進協議会」のもとに、若年教員の研修の拡充や教員養成の活性化に関する研究協議や情報交換等を積極的に行いながら実施してきた。
- 本プログラムでは、大学教員、県・市教委担当者からなる「実行委員会」、それに研修当事者である若年教員（本務者・臨時的任用教員）と教職志望学生の代表を加えた「運営委員会」を組織し、研修者自らが主体的にプログラムを開発したり、研修行事の企画、準備、運営や評価等に参画したりできるよう努めてきた。
- 本プログラムは、以下の3研修プログラム（研修行事等）で構成された。各プログラムについては、「Ⅱ 開発の実際とその成果」に示す。
 - ①「ちゃぶ台型ピア・サポート」
 - ②「講義・演習型研修」
 - ③「体験・省察型研修」



I 開発の目的・方法・組織

1. 開発の背景と目的

プログラム開発の背景と目的については、「平成21年度（独立行政法人教員研修センター委嘱事業）教員研修モデルカリキュラム開発プログラム報告書」で報告した。そこで、この項では、本プログラム開発に至る経緯を報告し、本プログラムの有用性について述べる。

本プログラムは、教育学部が、平成19年度、教職志望学生の学校現場や教育事象についての実践的理解と課題解決力の養成をめざし、現職教員や教育関係者と連携した教員養成プログラムとしてスタートしたものである（文部科学省「平成19年度教員養成改革モデル事業」採択）。そこでは、教職志望学生を対象とし、本学OB・OGや県内の若年教員を講師とした講義、演習や研究協議等を行っていた。

しかし、次第に彼ら若年教員の中から本プログラムへの参加を希望する者が出はじめ、年を追うごとに若年教員、特に本務者の受講者数が増加してきた（表1、図1）。若年教員同士や学生たちとの悩みや不安の共有、相談、ネットワークづくりや支え合いが見られるようになり「学生より自分たちの方が学んでいる」という感想が多く聞かれるようになった。

現在、山口県では若年教員（本務者）の相対的比率が低く、若年教員同士の交流や研修機会が少ない。教員の年齢構成、職場内人間関係の希薄さや彼らの経験や実績の乏しさ等から、彼らが孤立する傾向があり、常に不安や悩みを抱えながら教壇に立つ者も多い。また、近年、教育ニーズの多様化、補助教員の採用増や休職者の増加等により臨時的任用にある若年教員も増加している。彼らも正規教員と同じく学校教育において重要な役割を果たし、児童生徒、保護者や地域住民から正規教員同等の機能や指導力が求められている。高い期待や厳しい評価に曝されるが、特に臨時的任用教員に研修や交流の機会は少なく、自信の喪失や教職員集団での孤立・孤独等を見せる者もいる。それに伴い、彼らの教職に対する意欲、情熱や使命感等の低下も見られる。

若年教員やこれから教職に就く学生は、今後早い時期から中堅教員として学校を支え、漸増する経験の浅い教員を指導していく存在となる。採用後約10年迄の若年教員の研修ニーズをとらえ、仲間意識と連帯感あふれる研修集団の中で、振り返り、学び直しや積極的な提案等を伴う教員研修を充実させることにより、次代の教育界を担う彼らの教員としての資質能力を高めることは、今後の国や県の教育を左右する喫緊の課題でもある。そこで、平成21年度から、教員研修の充実と教員養成との一体化を図るべく本プログラムに取り組んでいる。

実施にあたっては、大学と山口県教育委員会・山口市教育委員会が連携し、教職経験の浅い「若年教員（本務者）」、「同（臨時的任用教員）」と「教職志望学生」による協働型研修組織「ちゃぶ台次世代コーホート」を設立し、学校現場での教育実践、教育実習や教職実践体験等の共有と省察、教えあい・学びあい等をさせることをとおして、教員としての資質能力の深化、教職実践課題の解決力、省察力の醸成等を図る教員研修のモデルプログラムを開発してきた。

表1 プログラムへの参加者数の推移

	学生	臨時的任用	本務者	計
19年度	35	13	7	55
20年度	37	19	13	69
21年度	39	22	20	81
22年度	35	23	40	98

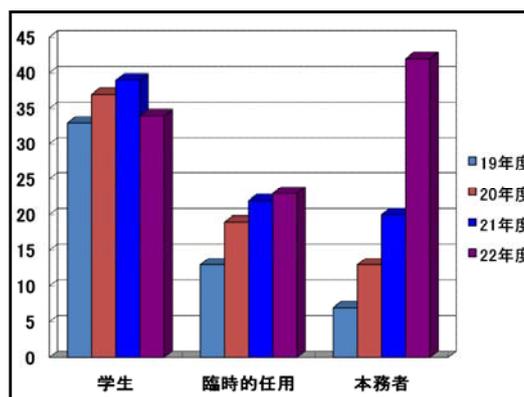


図1 参加者の変化

2. 開発の方法

本学教育学部は、平成17年度以降「『ちゃぶ台方式』による協働型教職研修計画」として、教職志望学生・大学教員・現職教員・教育行政担当者・教育関係者等との協働による「地域協働型教職研修」「省察・個別的支援型研修交流」「成果集積・共有型機能整備」に取り組み、「考える力を持ち、教員としての学びができる学生」の育成を柱とする教員養成事業の活性化を図ってきた。

今日、学校をはじめとした教育現場には様々な現代的教育課題が山積しており、これらの課題に適切に対応できる教員が求められている。しかし、その養成や資質能力の向上は、大学のみで達成されるものではなく、学生、大学教員、現職教員、教育行政関係者や保護者等多くの者の協働によるより広くより深い学びの保障が必要となる。その中では、これらの関係者は教える者と教えられる者という一方的関係でなく、互いに研鑽し合う関係であるべきである。上座・下座のない丸い「ちゃぶ台」を囲むように、互いの学びを深め合い共有する場と機会を創りたい。本学教育学部は、この理念「ちゃぶ台方式」による協働型教職研修事業「ちゃぶ台プログラム」に取り組んでおり、本プログラムのその一つとして実施している。

次に、本プログラム開発（第1年次）の成果と課題を次のとおり整理し、課題を第2年次の重点、配慮事項として進めることとした。

[成果]

- ・山口県教育委員会・山口市教育委員会との連携が進展し、教員の養成・研修の一体化に向けた機運が向上した
- ・各受講者層の特性、ニーズを生かし、相乗的に高める研修に一定の前進があった
- ・「ピア・サポート」の重要性が認識でき、実施上の工夫が見られた
- ・若年教員のための研修の在り方についての全県アンケートを実施し、現状の把握ができた

[課題]

- ・山口県教育委員会等主催研修との相乗効果を高める研修カリキュラムを考える必要がある
- ・研修参加層の特性、研修ニーズを生かした研修の仕組みづくりができること良い
- ・自主的、主体的に自らを高める研修集団（仲間）づくりを進めたい
- ・「ピア・サポート」のよさを積極的に生かした研修スタイルを工夫したい
- ・県・市教委と連携した協働型教職研修の拡充を図りたい

なお、本プログラムの開発にあたっては、大学と山口県教育委員会・山口市教育委員会との連携に加え、県内の学校や教育関係機関、団体等との連携、ネットワークが必要不可欠である。山口県教育委員会と大学間の「交流人事教員」や教員経験を有する「実務家教員」が、学内外をつなぐコーディネータとして機能する必要がある、そのあり方や関わり等についても継続的に検討することとした。

3. 開発組織

推進体制整備については、第1年次に高い評価を得たことから、本学教育学部・山口県教育委員会・山口市教育委員会による「教育連携推進協議会」のもとに「実行委員会」を置き、基本方針、企画検討や評価等を行うスタイルを継続した。

また、「実行委員会」構成団体担当者に受講者である「若年教員（本務者・臨時的任用教員）」「教職志望学生」の代表を加え「運営委員会」を置いた。推進組織に受講生を加えることにより、研修者自らが主体的にプログラムを開発したり、研修行事の企画、準備、運営や評価等に参画することができプログラムの活性化に大いに効果があったと考えている。

「実行委員会」は年間3回、「運営委員会」は各研修プログラムの計画、準備や運営等の中心となり各プログラム前に実施した。「運営委員会」には現職教員や学生もおり、校務やゼミ等と重なる場合は、電話連絡やメール交換等で進めた。

推進組織の構成、担当・役割分担等は次のとおりである。

【実行委員会】

所属・職名	氏名	担当・役割分担	備考
山口県教育庁	中馬好行	事業の方針・計画作成、評価等	審議監
山口市教育委員会	縄中宏明	事業の方針・計画作成、評価等	学校教育課長
山口大学教育学部	村上清文	総括（事業代表者）	副学部長
山口大学教育学部	霜川正幸	事業運営、渉外（事業主務者）	実務家教員
山口大学教育学部	長谷川裕	事業運営、渉外、連絡調整	交流人事教員

①第1回 平成22年5月31日（月）

- ・事業方針、計画や推進体制についての協議、決定
- ・教員養成・採用・研修や大学・県教委・市教委の連携等にかかる意見・情報交換等

②第2回 平成22年12月14日（火）

- ・事業の進捗状況報告、中間評価
- ・後半の事業計画や大学・県教委・市教委の連携等にかかる意見・情報交換等

③第3回 平成23年3月24日（木）

- ・事業総括、評価と今後の教員養成・採用・研修のあり方にかかる協議、意見交換
- ・次年度の事業実施に向けた工夫改善にかかる意見・情報交換等

【運営委員会】

所属・職名	氏名	担当・役割分担	備考
山口県教育庁 教職員課	松田靖	事業検討、他事業との調整、講師選定、各種調査等協力	人事企画班 主幹
山口県教育庁 教職員課	大塚泰二	事業検討、講師選定・派遣、各種調査協力、情報収集、指導助言	管理主事
山口市教育委員会 学校教育課	縄中宏明	事業検討、講師選定・派遣、各種調査協力、情報収集、指導助言	課長
山口大学教育学部	村上清文	総括（事業代表者）	副学部長
山口大学教育学部	霜川正幸	運営全般、財務、渉外、連絡調整	実務家教員
山口大学教育学部	長谷川裕	事業運営、渉外、連絡調整	交流人事教員
山口大学教育学部	鷹岡亮	体験省察型研修、渉外、連絡調整	准教授
山口大学教育学部	中村哲夫	運営全般、アドバイザー	特命教授
山口大学教育学部	佐伯里英子	運営全般、アドバイザー	客員准教授
6 附属学校・園	連携等担当教員	情報提供、連絡調整、企画検討等	各校 1 名
若年教員代表	川口慎司	研修計画、連絡調整、運営等担当	本務者
若年教員代表	渕内彩加	研修計画、連絡調整、運営等担当	臨時的任用
教職志望学生代表	才宮大明	研修計画、連絡調整、運営等担当	学部 4 年

- ①第1回 平成22年5月31日（月）
 - ・事業方針、計画や推進体制についての協議、決定
 - ・教員養成・採用・研修や大学・県教委・市教委の連携等にかかる意見・情報交換等
- ②第2回 平成22年6月10日（木）
 - ・山口大学と山口県との連携協力事業にかかる方針、内容、体制等についての協議
 - ・実行委員会報告、教育学部の教員養成・研修事業にかかる意見・情報交換等
- ③第3回 平成22年8月18日（水）
 - ・事業広報（対採用候補者広報、対外広報等）にかかる意見交換、協議
 - ・第1回、第2回研修会内容の検討、講師リスト整理等
 - ・講義・演習型研修の実施内容、計画等にかかる協議、意見交換
- ④第4回 平成22年9月8日（水）
 - ・事業の広報（県教委ウェブページ掲載等）についての協議、情報交換等
- ⑤第5回 平成22年10月22日（金）
 - ・採用候補者研修講座での連携、市教委初任者研修にかかる意見交換、協議等
- ⑥第6回 平成22年12月14日（火）
 - ・事業（前期）の総括、事業（中期）の計画案や連携強化に向けた協議
 - ・調査課題や次年度の事業実施にかかる意見・情報交換等
- ⑦第7回 平成23年1月5日（水）
 - ・事業（中期）の総括、事業（後期）の計画案や連携強化に向けた協議
 - ・「初任者研修」と「コーホート」の整理（内容、形態等）と意見・情報交換
 - ・次年度の事業方針、予算確保等にかかる意見・情報交換等
- ⑧第8回 平成23年2月7日（月）
 - ・第5回、第6回研修会内容の検討
- ⑨第9回 平成23年3月24日（木）～「第3回実行委員会」を兼ねて実施～
 - ・事業総括、評価と今後の教員養成・採用・研修のあり方にかかる協議、意見交換
 - ・次年度の事業方針、企画・運営等にかかる意見・情報交換等

II 開発の実際とその成果

1. 本プログラムの広報周知や参加者拡大の実際

本プログラムは、若年教員や教職志望学生の自主的、自発的参加を原則としている。「参加できる時に、参加できる範囲や形で、自由に関わる」ことが前提であるため、プログラム自体を、いかに広め、興味関心や意欲を持たせ、「手弁当」で「自腹を切って」でも、週休日に山口に行くという行動につながるかは重要である。この部分では、山口県教育委員会、山口市教育委員会との連携協力に頼るところが多く、実際に格段の支援、協力を得た。

山口県教育委員会は、プログラム開始前から、全市町教育委員会教育長、全公立学校長に対し、山口県教育委員会として本プログラムに関わる意義や構えを示し、プログラムの広報周知や推奨、各校種校長会での広報（図2）や協力依頼、山口県教育委員会（教職員課）ホームページへの掲載（図3）や「山口県教員採用候補者研修講座」での広報等多大な協力、支援を行った。

山口市教育委員会も、山口市立学校・園長会における事



図2 プログラム広報文書

業説明と参加奨励、広報チラシ（図4）等の配布や市内通送便の使用等の協力を行った。

学生に対しては、全学的な掲示、チラシ配布、メール配信等による広報、参加奨励を行い、事業説明、行事等の計画案内等について教育学部ちやぶ台プログラムWebページ（電子版ちやぶ台：e-ちやぶ）により広報を行った。（図5）



図3 県教委ホームページ画面



図4 市教委広報チラシ



図5 山口大学教育学部「e-ちやぶ」紹介画面

2. 「ちやぶ台次世代コーホート」研修会の実際（研修内容、講師や研修スタイルの具体）

【第1回研修会】（趣旨、日時、場所、研修内容、形態、指導者、評価等）

①趣旨

協働型教職研修の第1次行事であることをふまえ、今後の活動に対する意欲、態度や主体的な参画意識等の向上を図る。

学校における諸課題を理解するとともに、これからの教員像を考える契機とする。

②開催日時 平成22年10月2日（土） 14:00～17:30

③開催場所 山口大学教育学部 「ちやぶ台ルーム」

④研修内容等

(1) 指導講話、意見交換（部会別）（14:00～15:30）

テーマ 「次代の教育を担う若手教員に期待したいこと」

講師 周南市立富田東小学校 校長 松田福美先生

下関市立長成中学校 校長 野村浩之先生

⑦受講後の感想から～現職教員と学生の「自己評価表」より一部を紹介する～

1 研修に参加しての感想、意見、質問や要望

(現職教員)

- ・ 久々のコーホート、新旧の出会いに心躍りました。現場での話を聞いてもらえてかなり楽になりました。また、同じような状況で悩んでいらっしゃる方もおり、自分だけではないのだと知ることができ癒える場となりました。やはり、コーホートがなきゃと思いました。(高校：本務：3年目)
- ・ 若手教員に求められることをお聞きし、自分には2つが足りていないと感じました。1つは努力です。もっと学習指導や生徒指導の専門性を身につけたい。もう1つはより広く社会(世の中)と関わるということです。視野や考えを広げ、人としての器を大きくしたい。(小学校：本務：1年目)
- ・ 初めて参加しました。最初は不安でしたが、和気あいあいとした雰囲気の日頃の仕事の悩みが気軽に話せたことで心がスッキリしました。(高校：臨採：2年目)
- ・ 3年目を迎え、私なりに考えることが多くなったように思います。その中で改めて「何が期待されているか」という話を聞くことができ、今後の為に役立てたいと思いました。「教員として」「社会人として」子どもの手本になるということは、特に気をつけたいと思いました。(小学校：本務：3年目)
- ・ 校長先生から教育に対する情熱を学んだ。単に「教える人」ではなく、「教師」になろうと思った。高校に勤めている先生方と悩みを共有して、同じような悩みを持っているのだと感じた。(高校：本務：1年目)
- ・ 今日のように意見交換を活発にすることができたら、実りの多い研修会になると思います。若手故に受信が多い中、少しでも発信できる機会は貴重だと思います。(小学校：本務：2年目)
- ・ 久しぶりに会える顔ぶれで本当に嬉しくこのような場を与えていただけることに改めて感謝します。夢ではなく志を持ちたいと思いますし、子どもたちにも伝えていきたいと思っています。(高校：臨採：1年目)

(学生)

- ・ 実際に働かれている方と多く話をさせていただく機会があり、とてもこれからの参考になりました。自分たちの考えている教育現場と、実際先生から聞く話にはギャップがあり良い勉強になりました。(経済：3年)
- ・ 昨年度から3回目の参加ですが、やはり本当に学ぶことが多いなと感じました。現職の方のお話や校長先生のお話が聞けて本当によかったです。要望となりますが、去年の食育の話が予定とかぶり半分しか聞くことができなかつたので、家政教育としてぜひ聞きたいと思います。(教育：2年)
- ・ 学生最後のコーホートが始まったということで、学生という立場から、自分にできること、これからやらなければならないことを確認する機会となりました。校長先生や現職の先生のお話を聞いて、改めて学校現場に必要な力を確かめることができました。今後更に考えながら生活したいです。(教育：M2)
- ・ 校長先生のお話をお聞きして、現場で生徒と関わり合うことの難しさ、喜びというものが少し分かったような気がしました。どんな学校であれ、生徒と向き合うことは大変大切なことだとひしひしと感じました。(教育：M2)
- ・ 今年のコーホートが始まってワクワクドキドキしてきました。いろいろなイベント楽しみにしています。(教育：M2)

2 講師以外から＝研修参加者から「学んだ、教えられた、刺激された」と感じたこと

(現職教員)

- ・ 一つ一つの意見がすべて刺激になりました。学生の意見からは、自分の忘れかけていた夢や熱意を改めて感じました。現職の先生方からは、具体的なお話を教えていただき、学級に帰って即実践しようと思いました。（小学校：本務：1年目）
- ・ 「問題行動がみられたとき、まず原因や理由を考える」など、同世代でも多くの知識や経験を持った先生方がいることに刺激を受けました。（小学校：本務：3年目）
- ・ 考え方を聞くことで、自分のものの見方が多方向（多面的）になっていくことを改めて感じます。今日も新たなものの見方を得ることができました。（中学校：臨採：3年目）
- ・ ほめ方一つでも様々な方法を日々の実践で試されている先生方がいらっしゃいます。自分も負けずに考えて自分の力や技術を高めていきます。（小学校：臨採：4年目）
- ・ 自分の畑（興味の対象）以外の話を聞くことができるので直接的に学びになるし、これから研修していく方向性を得ることができた。授業中心、授業での学級づくりは考えてきたが、問題場面の対応など鍛えていきたい。（小学校：本務：4年目）
- ・ 様々な問題を抱える学校で、精一杯悩みながら向き合っている同世代の姿に、自分ももっとしっかりしようと思いました。（高校：臨採：1年目）

（学生）

- ・ 「よいところ見つけ」など自己肯定感を持たせる取り込み、具体的な工夫が様々なのだと知ってバリエーションを増やしていきたいと思った。（教育：M2）
- ・ 色々なことを学べたが、やはり未だ学生の身分であり実際にトレーニングする機会が少ないことは残念だと改めて感じた。コーホートにいられている方でも教員採用試験に苦労されているようで自分もうかうかしていただけないと思いました。「参加しているだけで満足してはいけない」という言葉にハッとさせられました。（教育：3年）
- ・ 学ぶことが多くあることを再確認できました。学生のうちにこのような機会等をたくさん経験し、ある程度の心構えをつけていきたい。（教育：M2）

【第2回研修会】

①趣旨

指導の充実深化に向けた教材開発、授業づくりや言語表現活動等の実践事例研究、研究協議等を行い、実践的指導力や研修意欲、態度等の向上を図る。

②開催日時 平成22年11月7日（土） 13:30～17:30

③開催場所 山口大学教育学部 「ちゃぶ台ルーム」

④研修内容等

(1) 模擬授業、講話 (13:30～15:00)

テーマ 「ありふれた日常の『不思議』～不思議学習に関わって～」

指導者 Howcang! コンテンツプランナー 藤本正之さん

(2) 実践事例発表、研究協議 (15:00～16:00)

テーマ 「特色ある教育活動の実践～NIEを中心に～」

講師 田布施町立麻郷小学校 教諭 山根基秀先生

山口市立阿知須中学校 教諭 河村宏子先生（図8）

(3) グループ演習、交流研修 (16:00～17:30)

ピア・サポート「現場実践での不安、悩みや問題等の解決に向けて」

グループ演習 「研修の仲間づくり、CSSトレーニング」等

⑤参加者 若年教員22人、教職希望学生12人、
講師・スタッフ等11人 計45人



右:図8 当日の新聞記事(山口新聞11.9)

⑥受講後の感想から～現職教員と学生の「自己評価表」より一部を紹介する～

1 研修に参加しての感想、意見、質問や要望

(現職教員)

- ・ 学ぶことの根本を学んだ気がします。日頃、行事や雑務に追われて教え込みになりかけていた授業を改善するきっかけとなりそうです。もう一度先生になりたいと思ったときのことを思い出して明日から再出発です。(小学校：本務：4年目)
- ・ 「なぜ出来ないのかではなくどうしたら出来るかを考える思考回路が大切」という言葉は、聞いた瞬間胸にグサッとささりました。私は授業を終えた後「なぜ出来ないのかな」と考えることが多いからです。前向きに考えて楽しく授業をやろうと思いました。(小学校：本務：2年目)
- ・ なぜ? どうして? という気持ちを、子どもも自分も大事にしていきたい。教材や導入は世の中にたくさん溢れていて、どう視点を変えてみるができるか、自分の力なのだと思います。(高校：本務：1年目)
- ・ 授業を組み立てていく時、新しいことをしっかり教えなければと考えるあまり、考えることの楽しさを伝えることをついつい忘れがちになっている。生徒に自主的に考えさせる力をつけさせるにはどうすればよいか常々考えていきたい。(中学校：本務：1年目)
- ・ 具体的な実践を聞くことができ授業で明日から取り入れられそうなものがたくさんあり勉強になりました。日々の授業では、時間がないなどと理由をつけパターン化しているところもあるので、色々新たな視点から考え教材研究をしていかなければと刺激を受けました。(小学校：本務：3年目)
- ・ 「N I E実践」では新聞の様々な使い方を学んだ。特に先生の実践の中で、「生き方を考える」ために新聞を利用するという事に共感した。自分で1年半くらい前からスクラップを始めてみて、私自身がどのようなことに興味があるのかどんな視点で世の中を見ているのかということがよく分かるようになった。自分が気になった記事＝自分のような気がする。その時の気分によっても目につく記事は違うのでおもしろい。生徒にも新聞を通じて、そのような自分発見の体験をさせたいと思った。(高校：臨採：1年目)
- ・ 新聞という身近な題材を使って、たくさんの方のことを学べるのだと気づかされました。目の前の課題を解決すること、考えること、立ち向かうことを避ける子が多いと感じることがよくあるので、今日の経験を生かし「対話する力」をつけさせていけたらと思います。(高校：本務：1年目)

(学生)

- ・ 理数科目をあまり苦に感じたことがないので、理数離れといわれる現在の子どもの状況を確認に捉えることができていませんでした。今日、実践を見せていただき楽しく算

数を学びながら、論理的な思考力をつけることは大切だと感じました。(教育：2年)

- ・ N I Eでは、新聞の内容を教師としていかに多面的、多角的な視点から解釈して児童や生徒に伝えていくかということが重要であると感じます。私が考えた新聞の活用の解釈とは違いこのような使い方があるのだ！と感動しました。(教育：4年)
- ・ 新聞がこれほどまでに教材として使えるのかということに驚いた。私は、高校理科ですが、環境や最新の科学などの分野やHRでも使えるなと思った。(教育：M2)

2 講師以外から＝研修参加者から「学んだ、教えられた、刺激された」と感じたこと (現職教員)

- ・ 久しぶりに参加させてもらってよかったです。懐かしい仲間に出会ったこと、頑張っている人たちに出会ったこと、自分より若いのに力がある人に出会ったこと、いろんな良いことがありました。(小学校：本務：4年目)
- ・ 山口に来れば一緒に勉強する仲間がいるというのが心強い。(小学校：本務：4年目)
- ・ 1年目で日々の余裕が全くなく、ただ授業をこなすだけになっていたのが今日参加してとても新鮮な気持ちになることができました。教えるってこんなに楽しくて自分自身も成長できる、成長しなければならぬのだと思いました。(高校：臨採：1年目)
- ・ 同年代で頑張っている人たちにふれて、私も負けていられないなと感じました。また明日から頑張ります！(小学校：本務：4年目)
- ・ 昨年コーホートに参加された方が今年もたくさんいらっやって、みなさん前向きに頑張られているんだなと思いました。(小学校：本務：2年目)
- ・ 答えが分かった人をすごいと思うと同時に自分が分かって他の人に説明したときに「すごい」と言われうれしかった。子どもにも「わかった」「ほめられた」という思いを少しでも増やせるよう関わっていきたくと思った。(中学校：本務：3年目)
- ・ 関連施設職員や他校種の先生方との情報交換がとても有意義でした。こういう他校種、他業種交流は良いと思う。(小学校：本務：2年目)

(学生)

- ・ 私はまだまだだなあという感じもあった。現役の先生方はとても意識が高いし、メモもたくさんとっていた。まだマネというくらいしかできないが頑張りたい。(教育：1年)
- ・ 講演中など現場の先生(先輩方)の積極的な姿勢に驚き、負けていられないと感じました。学生は人数が少なく先輩方ばかりで緊張しますが、前に出て「恥をかく」勇気を持ち積極的になることが、まだ足りていないと感じました。(教育：4年目)

【第3回研修会】

①趣旨

国際理解教育、豊かな人間性や社会性、対人関係能力やコミュニケーション能力等に視点をあてた講義、演習等をとおして、教員としての資質能力を高める。

②開催日時 平成22年12月4日(土) 13:30～17:30

③開催場所 山口大学教育学部 「ちゃぶ台ルーム」

④研修内容等

(1) 国際交流、実践報告 (13:30～14:10)

テーマ 「ワット・ボー小学校(カンボジア)の先生方をお迎えして」

ゲスト ワット・ボー小学校 プン・キムチェンさん、マー・パーラーさん

ワット・ボー小学校(校長補佐：青年海外協力隊経験者) 田中千草さん

(2) 実践報告、質疑応答 (14:20～15:20)

テーマ 「日本人学校（パリ）勤務を経験して」

発表者 美祢市立東厚小学校 校長 木本吉則先生

(3) 講話・スキルトレーニング (15:30～17:00)

テーマ 「思いを馳せること、話すこと、伝えること」

指導者 TNCテレビ西日本 アナウンサー 小山一英さん

(4) グループ演習、交流研修 (17:00～17:30)

⑤参加者 若年教員24人、教職希望学生16人、講師・スタッフ等20人 計61人



⑥受講後の感想から～現職教員と学生の「自己評価表」より一部を紹介する～

1 研修に参加しての感想、意見、質問や要望

(現職教員)

- ・ カンボジアの教育や日本人学校の様子がよく分かって良かった。子どもたちの写真、素敵な笑顔、表情を見て日本の子どもたち、自分のクラスの子どもがこうなればいいなとまた目標が見えてきた気がする。話し方演習については、本当にイメージは大切と最近思っている。低学年を担当しているので範読が大事と言われているが、私自身もっと学び、練習が必要だなと感じる。参加して良かった。(小学校：本務：3年目)
- ・ カンボジアの先生のお話をお聞きして、日本人は恵まれすぎて大切なことを見失っていると思った。当たり前で教えたり学んだりできることを有り難いと改めて感じた。子どもたちのキラキラした瞳が印象的で、日本の子ども、自分の子どもの瞳も輝いてほしいと思ったし、そのために自分も頑張りたいと思った。(小学校：臨採：3年目)
- ・ カンボジアの先生のお話、本当に感動しました。日本ではハーモニカなど普通にみんな買えるけどカンボジアではあんなに喜んでもらえる。裕福なことは喜びや感動を減少させるのではないかと思います。今の学校ではペンを投げたり食べ物を投げて粗末にしたりする子どもがいて、もっと物を大切にしてほしいという思いを抱いています。日本からの贈り物をあんなに喜んで子どもの姿本当に感動しました。(中学校：本務：3年目)
- ・ 国際交流ではカンボジアの子どもの生き生きと学ぶ姿を見て、今のクラスの子どもたちとの関わり方を振り返ることができた。日本人学校についてのお話を聞きながら、帰国子女の児童が安心して学べるクラスをつくりたいと考えた。話し方演習では、責任の重さを学び子どもたちに伝わる話し方を身につけたいと思った。(小学校：本務：4年目)

(学生)

- ・ 私は高校生の時に「山口から世界を考える高校生仲間」という会に参加しており、JICA九州の交流会に参加したり、下関の海峡メッセでロシアの方たちにチェルノブイリについて話を聞いたりしていました。JICA中国で2泊3日の高校生体験プログラムに参加したこともありました。高校の時はあんなに一生懸命に取り組んでいたのに、大学生になってあまり積極的に勉強していない自分に気づくことができました。もっともっと広くアンテナを張っておこうと改めて思いました。(教育：2年)
- ・ カンボジアの子どもたちの笑顔が印象的。やっぱり子どもたちの笑顔はいいな、こんな

素敵な笑顔をいつまでも見守っていたいなと思いました。そのために自分にできることはしていきたいし、そのためにもまず自分自身が成長したいと思います。（教育：4年）

- ・ 私は日本の教育現場しか考えていなかったのですが、今日はとても刺激を受けることができました。特にカンボジアの学校の様子をお教えいただいたときは、いかに普段の自分が怠慢な生活を送っているかを実感させられました。また話し方講座では、伝えるためのスキルを伝授いただき国語の教員を目指す私としてはとても興味深い内容ばかりで勉強になりました。ただ、今日は自分のコミュニケーション能力のなさに嫌気がさした一日でもありました。もっと人と話せる力をつけたいです。（人文：2年）
- ・ 今回のコーホート（カンボジアの先生の話、木本先生の話、話し方演習）の3本立てでしたが、どの時間にも共通して感じたことは「自分自身の在り方」について深く考える機会になりました。まだ現在の私は、生半可な気持ちでしか「教員」というものを考えていないと反省するととても貴重な機会になりました。（教育：4年）

2 講師以外から＝研修参加者から「学んだ、教えられた、刺激された」と感じたこと （現職教員）

- ・ 同志に会って刺激を与えられる、学校では出せない本音を語ることができ、それにアドバイスをもらうこともできる、少しでも力をつけて今の自分ができる最大限のことを生徒にできればと思う、コーホートは修養の場であり、憩いの場だと考えている、これらのことを今回も実感した。（高校：本務：3年目）
- ・ 教員研修というと形式張った形で、意見の交流もあまりできないイメージがあったけれど、若手の先生が集まり気さくに話し合いながら向上していくスタイルに興味を持ち参加しました。（小学校：本務：3年目）

（学生）

- ・ 初めて参加したきっかけは単純に先輩に知り合いがいたというものでした。でも、本当に多くの場面で様々な学びがあり、大切な場所になっています。（教育：4年）
- ・ コーホートでは受動的な学び、他の先生、学生との交流による学び、自分の意見等を積極的に出すことでより多くの人からの価値観を受け取る。研修会での準備、片づけなどから運営の仕方等々コーホートのあたたかい雰囲気、先生方、学生の仲間としてのつながり、私の知的好奇心や教員を目指す決意を毎回刺激してくれる、そんなコーホートにとっても魅力を感じます。（教育：4年）
- ・ 自分ひとりでは学べないことが「コーホート」に来ることで学べるし、実際に教員をされている方に出会い良い刺激をもらえるので、これからもぜひ参加したいと思います。（教育：3年）
- ・ 毎回、大学の授業では学べないことがたくさんあり、周りに熱い気持ちを持った先生がおられる中、自分を見つめ直すことができます。毎回毎回新鮮な気持ちで勉強させてもらっています。本当にありがたいと思っております。（教育：2年）
- ・ コーホートに来ると自分自身の生き方について考えるきっかけになります。今までの生活を振り返ったり、先輩たち、先生たちと様々な人の考え等を知ることができて、何か必ず学びがあるというのが魅力です。（教育：M2）

【第4回研修会】

①趣旨

家庭・地域社会や企業等との連携を活かした学校教育のあり方や、組織マネジメントをふまえた新しい学校づくりのあり方等の研修、演習等を行う。

②開催日時 平成23年1月8日（土） 13：30～17：30

③開催場所 山口大学教育学部 「ちゃぶ台ルーム」

④研修内容等

(1) 指導講話 (13:40～14:40)

テーマ「長期社会体験研修（企業派遣）と新しい学校づくり」

指導者 下関市立滝部小学校 校長 澤田英人先生

(2) グループ演習 (14:40～15:20)

研修参加者による校種別ピア・サポート

(3) 講義、交流研修、研究協議 (15:30～17:30)

テーマ「親の思いに寄り添って ～教員に、保護者に、一緒に、できること～」

指導者 萩市立萩西中学校 P T A 富川芳人さん

光市立島田中学校 P T A 木村信秀さん

美祢市立大田小学校 P T A 山本哲哉さん

萩市立川上中学校 P T A 佐久間菜穂美さん

周南市立櫛浜小学校 P T A 江草志真さん

山口県 P T A 連合会事務局 岩村智子さん

山口県 P T A 連合会事務局 辻本千夏さん

⑤参加者 若年教員25人、教職希望学生15人、講師・スタッフ等13人 計53人



⑥受講後の感想から～現職教員と学生の「自己評価表」より一部を紹介する～

1 研修に参加しての感想、意見、質問や要望

(現職教員)

- ・ 地域に貢献する学校というのはよく聞くが、実際にどういう点で貢献するかとかどのように貢献するのかということは考えたことがなかったので、話を聞いて生徒を満足させることがそれにつながるのだということが分かった。保護者の方々との交流も貴重な経験であったが、高校は保護者と教員が密接に関わる場面が少ない。少ない場面の中でいかに子どものことで話ができるのかが信頼の鍵になると思った。(高校：本務：2年目)
- ・ 「保護者と教師が仲良くなれば子どもは安心して学校に通える」という言葉が印象に残っています。忙しい中、生徒だけでなく保護者の方とのコミュニケーションを忘れず意識的に取っていこうと強く思いました。(中学校：臨採：1年目)
- ・ 学校以外にも目を向けることも大切。企業でも学校でも根底にあるものは変わらない。P T Aの方々と話していると「頼もしいなあ」という気持ちになる。11日から3学期で少し憂鬱でしたが、なんだか少し明るい気持ちで学校に行けそう。(小学校：本務：2年目)
- ・ 「先生も P T A なんよ。」「親と教師というより人間対人間」「先生は他人以上身内未満」…数々の心強い、あたたかいお言葉を頂くことができました。また、私は地域の行事にも参加したり(最初は気が重かったのですが…)「一緒に頑張りましょうね。」と声をかけたりしていたのですが、それが保護者や地域の方々にとっても嬉しいことだったのだと確信し少し自信が持てました。(小学校：臨採：2年目)

- ・ マネジメントという視点で学校について考えるきっかけになったと思います。私の学校とは校種のちがう学校の例だったので、自分の学校ではどのようになるかを後日考えたいです。特に私の学校は新設2年目で組織の仕組みもこれから作っていくところなので現場を通して学んでいきたいと思いました。またPTAの方のお話を中・高の現場経験なしでお聞きし、特別支援学校との違いも比較しながら中・高の難しさを勉強することができました。（特別支援：本務：2年目）

（学生）

- ・ PTAとの交流では、非行生徒の話題など現職でない為難しい話も多々ありましたが、普段聞くことができない保護者の思いなどを聞くことができ勉強になりました。今後は教師として「信念」をもって取り組んでいこうと思いました。（教育：M1）
- ・ 今日の研修を通して「まだ自分が教師になるには早いかなあ」と思いました。自分の視野の狭さや考えの浅はかさを実感し、「まだまだ勉強することがたくさんあるなあ」と思ったからです。しかし今日の研修で保護者の方から求められている教師像や、今の時代に求められていることなどが具体的にイメージでき意欲が湧いてきました。ありがとうございました。（人文：3年）

2 講師以外から＝研修参加者から「学んだ、教えられた、刺激された」と感じたこと

（現職教員）

- ・ 「困っていること」の話になると、やはり活動的な子の話になってしまう。しかし、学生が「そのような子達の話はよく出るけど、不登校の子達はどうかですか」と質問してくれた。その時、自分の視野が狭いことに気づかされたし、もっといろいろな見方で普段から考えていかなければいけないと思った。（中学校：臨採：3年目）
- ・ 幼稚園の先生がグループにいらっしゃったおかげで幼稚園での子どもの見方や関わり方について学ぶことができました。（小学校：臨採：4年目）
- ・ ○○先生の「子どもをしっかり見ていなければ気がつかないなあ」というお話を聞いて見習おうと思いました。荒れている子の荒れない部分、荒れていない子の荒れている部分を見ることができるようになりたいです。（高校：臨採：1年目）
- ・ 中高の先生や志望する学生と話をし、課題が学校側の要求的なもの（子どもが話を聞かない）になっていることが多いと感じました。特別支援は、子どもの要求から課題を探ることが多いのでそれとのギャップを感じました。（特別支援：本務：2年目）
- ・ 最後学校関係者、教育関係者以外でどのくらいの人が倒れたときに駆けつけてくれるかという話がすごく印象に残りました。いよいよ2年目、もっと学校の外に目を向けて出かけていこうと思います。（小学校：本務：1年目）
- ・ PTAとの話で学校教育に関わる保護者、学校教育の中での保護者の立場というものを学びました。しかし教育は家庭、地域、学校と様々な場で行われていてそれらのことと連携協働していくことが必要だと思います。そういう意味で家庭教育における保護者の様子や悩み、思いを知る機会があってもいいかなと感じました。（小学校：臨採：2年目）

【第5回研修会】

①趣旨

教材開発、授業づくりや豊かな心の育成等についての実践事例研究、講話やコンサートを行うことをとおして、実践的指導力や研修意欲、態度等の向上を図る。

②開催日時 平成23年2月11日（金・祝日） 13：30～17：30

③開催場所 山口市湯田温泉 「ホテルニュータナカ」

④研修内容等

- (1) 講演、グループ演習（班別実践事例研究）（13:35～15:00）
 テーマ 「学習づくり、授業づくりと教材開発」
 指導者 千葉県市原市教育委員会
 学校教育部教育センター 所長 土田 雄一 先生
- (2) 研究協議、グループ演習（15:10～15:40）
 研修参加者によるピア・サポート（教職実践上の悩み等の解決）
- (3) 講話、コンサート（15:50～17:30）
 テーマ「金子みすゞのメッセージ ～今こそ、豊かな心を育てたい～」
 指導者 歌手・作曲家（山口市在住） ちひろ さん

⑤参加者 若年教員21人、教職希望学生15人、講師・スタッフ等9人 計45人



⑥受講後の感想から～現職教員と学生の「自己評価表」より一部を紹介する～

1 研修に参加しての感想、意見、質問や要望

（現職教員）

- ・ 身近なところに教材は溢れていて、それに気づき教材を変える感性や発想力がとても大切だと分かった。教師に発想力があれば子どもに伝わると思う。ちひろさんからはプロとしての表現力を学んだ。専科のことばかり考えて仕事をしているが、詩や様々な分野のことにも触れ、そのすばらしさを伝えていきたいと思った。（中学校：臨探：3年目）
- ・ 土田先生のお話から、教材開発の毎日を生き抜いている私にとって自分の狭い教材観を幅広く広げてくれる発想力のヒントを頂き、また一から頑張っていこうというパワーを頂きました。ちひろさんからは、「子どもたちは教師に似る」という言葉が深く印象に残りました。自分と関わっている生徒たちのことを思い出し、自分に似てきているのかなと不思議な気持ちになりました。（中学校：本務：1年目）
- ・ 人間関係づくりを意識的に取り組むことの大事さを改めて感じた。既存のものから発展させるという発想で考えると「自分もやってやろう！」と思える。そのためにも既存のグループ活動や子どもの発達などをさらに学習したい。グループ協議では、100均のグッズが様々なものが出てきたが校種が違えば使い方も違うことが面白かった。グッズに対する思い、狙いが違うと自然にそうなるのだと思う。みんなの熱い思い、工夫を聞くことができ良かった。ちひろさんのコンサートでは、普段詩や歌を味わう機会は少ない。ちひろさんの詩への思いなどひとりで鑑賞するだけでは気付けないこともあり良かった。（特別支援：本務：2年目）

（学生）

- ・ グッズを使っての人間関係づくりと教材開発の技を学びました。土田先生はご自分が長年かけて考え出されたたこに対してもまだ発展性のニュアンスを出されていて、現状に満足しないご自分に厳しい方だと分かり私は生き方も学びました。先生ほど教材開発の発想力はありませんが、まず考えないと何も生まれないことに気づきました。ひとりで考える

時間も大切にしたいと感じました。(教育：2年)

- ・ お話から学んだことは、あまり難しく考えずにいろいろ挑戦していくことが大事だということです。その中でアイデアが生まれてくる気がします。ちひろさんのコンサートではすごく心がスッキリ洗われた気がしました。金子みすゞの詩は知っているけれど深く考えたことはなかったので、もう一度詩を読んでみたいと思いました。(教育：4年)
- ・ 土田先生のお話では、何でも発想一つでものが変わるということ、使い方次第ということを理解しました。でもまだ聞いただけなのでやってみないと分からないと思います。ぜひ実践したいです。グループ協議では学活で使えるグッズを考えている先生方がいて教室を明るくしていこうと努力されていることに感動しました。また席替えの方法を悩んでいるのも現実的な問題なのだろうと思いました。ちひろさんのコンサートからは、子どもの可能性を伸ばすことを実践したいと思いました。自分も見られる側になることを自覚しなければいけないと思いました。(教育：4年)

2 講師以外から＝研修参加者から「学んだ、教えられた、刺激された」と感じたこと (現職教員)

- ・ 久しぶりの参加でしたがすべての参加者からエネルギーをもらった。特に柔軟な発想や資料準備をする行動力、笑顔、先生方の言葉、すべてが疲れを消すくらいエネルギーになった。(中学校：臨採：3年目)
- ・ 1年ぶりの参加にもかかわらず、相も変わらずに接してくれるコーホートの皆さんの優しさに触れ元気ももらいました。ありがとうございます。(中学校：本務：1年目)
- ・ 「ちひろさんに出会えたかった」という先生の想いに感動しました。人と人を結びつけたり出会わせるというのは素敵な仕事です。そういう出会いがたくさんあるのがコーホートの醍醐味ではないでしょうか。ありがとうございます。(高校：本務：1年目)

(学生)

- ・ ちひろさんのコンサートでは、予想した以上に金子みすゞの世界に奥深くまで触れることができました。幼いときに金子みすゞの詩の朗読を聞いたときとはまた違った言葉の響きを感じました。言葉一つ一つにこめられたメッセージの大きさに驚き、私たちに多くの教訓を残しているのだと思いました。研修で感じたことや考えたこと、話をして深まったことなどを今後の人生に生かしていけたらと思います。(教育：2年)
- ・ ○○先生が昨年以上に進化した100均グッズの実践を画用紙に描いたものを見せてくださいました。先生のチャレンジする気持ちも、努力を惜しまない気持ちも、謙虚さもすべて刺激となり、学ぶべきことだと思いました。(教育：2年)
- ・ 現職の先生方で、私たちから見ると十分すごいと思う人でも他から学ぼうとする貪欲さを見習いたいと思った。(教育：3年)
- ・ 現場の先生方の話からは「～のために」「～な子がいるので」というように子どもを常に考えている姿に来年は自分もそうありたいと刺激を受けました。(教育：4年)

【第6回研修会】

①趣旨

若年教員の現場実践にかかる事例研究、ピア・サポートやメンタルヘルストレーニング等を行うことをとおして、教員としての資質能力の向上、教育実践上の不安や悩みの除去等に資する。

②開催日時 平成23年3月5日(土) 13:30～17:30

③開催場所 山口大学教育学部 「ちゃぶ台ルーム」

④研修内容等

(1) 実践事例発表、研究協議、ピア・サポート (13:40～15:20)

テーマ 「私の現場実践とカミングアウト&悩みの克服」

発表者	滋賀県甲賀市立土山小学校	教諭	中川翔太先生
	広島県尾道市立因北小学校	教諭	梶本明伸先生
	広島県三次市立神杉小学校	教諭	飯干新先生
	千葉県館山市立第一中学校	教諭	山口真里奈先生
	大阪府堺市立上神谷支援学校	教諭	川口慎司先生
	広島県立尾道東高等学校	教諭	黒川真実先生
	広島県立尾道東高等学校	教諭	笹田麻実先生

(2) 指導講話、演習 (15:30～16:30)

テーマ 「メンタルチェックと感覚過敏症緩和、ストレスとのつきあい方」

指導者 ジークレフ心と脳の健康センター

メンタルヘルストレーナー 小川麻理子さん

(3) 激励の言葉 (16:40～17:10)

山口県教育委員会

教育長 田邊恒美

(4) 閉講式 (17:10～17:30)

⑤参加者 若年教員22人、教職希望学生11人、講師・スタッフ等14人 計47人



⑥受講後の感想から～現職教員と学生の「自己評価表」より一部を紹介する～

1 研修に参加しての感想、意見、質問や要望

(現職教員)

- ・ 校種別交流では、現場で頑張っている先生方の実践を聞いてとても参考になりました。今はクラス経営も何か良いものがあれば取り入れてみたいと思うのですが、日々一杯一杯でという言い訳で何もできていないなと思いました。まずはいろいろとやってみることも大切だと思ったし、何よりみんな同じようにクラスでの問題を抱えながら日々頑張っているんだということが分かってよかったです。また中馬先生のお話も心に

響くものでした。言葉を発する人間を見ているというのはまさにその通りだと感じる場合があります。（小学校：臨採：2年目）

- ・ 同期の仲間が何を学び、何を考え、何を実践し、何で悩んでいるのかが見えるのは面白く、それぞれの活躍から学びの新たな方向を得られた。（小学校：本務：4年目）
- ・ 距離感是人によって違うのだということを聞き、とても気が楽になった気がします。こうあるべきという人付き合い像があってストレスに感じていた自分に気づき、ストレスが解消できたみたいです。（中学校：臨採：3年目）
- ・ 自分の1年間を振り返りながら話をしたり、聞いたりすることができました。協議の中でやはりほめることが大事ということが出てきましたが、教員同士でも自分たちのことをほめあって認め合って意見交換することが大切な息抜きになるのではと思いました。小川先生の話では「私もたまにこういうことあるな」と思うことがいくつかありました。千葉では友達も少なく一番年の近い女性の先生が40代後半で、なかなか相談できる相手もいません。自分の心の状態をチェックしながらうまくストレス発散させたいと思いました。（中学校：本務：1年目）
- ・ みんなよくまじめに頑張っているというのが正直な感想です。明るく、しっかりと話ができるということは、その裏にたくさんの思いや、葛藤があったのだと思います。自分も一年後いい顔をして話ができるだろうかと思いました。一人ひとり感じ方も違えば記憶の仕方も違います。今の自分を嫌いになりたくないの、自分の認め方を方向を変えてみたいと思うし、生徒や先生方にもそういう見方をしたり、生徒への話のネタ、実践になると思いました。（高校：臨採：1年目）

（学生）

- ・ 若い先生の話は、ベテランの先生とは違って現場についての悩みがたくさんあると思います。そんな先生方の悩みや、学校で行っている取組を聞くことができ良かったです。私は去年中学校に実習に行きましたがやはり2週間だけでは本当の学校現場の様子は分からないと思います。今回のこの企画で先生方の生の声を聞いて改めて教師になることの責任などを実感させられました。（人文：3年）

2 講師以外から＝研修参加者から「学んだ、教えられた、刺激された」と感じたこと

（現職教員）

- ・ 特別支援の先生の話聞き「子どもの課題にあった支援の仕方を考えていく」ということに関して、診断を受けている、いないにかかわらず全ての子どもに当てはまることだと改めて思いました。（中学校：臨採：3年目）
- ・ 交流会で話をした学生の皆さんから色々質問されましたが、不安なこともいっぱいあるのだなあと思います。色々な現実も語ったけど、理想に近づけるために頑張ればいいのかなあと思った。（高校：本務：1年目）
- ・ 学生が教師としてのonとoffを気にしていると感じ、自分があまり考えていなかったことに気づきました。この点について考えてみようと思いました。（高校：本務：1年目）

（学生）

- ・ 現職教員の方から今の不安や現状をお聞きすることができた。すごい情熱を持って、仕事をされている姿がかっこよかった。すべては子どものためという気持ちが強くて、逆にそうでなければやっていけないだろうと思った。また中馬先生のお話がすごく心に残った。中学校時代、吹奏楽部の関係でお世話になったことがあったが、とても魅力のある先生だと感じた。今教職を目指す立場となって、また違う魅力を感じる事ができた。（理：3年）

3. 自主的、主体的に自らを高める研修集団づくりの実際

本プログラムのねらいは、「与えられた研修（内容、方法等）」を黙々とこなす若年教員を育てることではない。現時点では、経験の浅い「若年教員」かもしれないが、日々の教育実践や教員（社会人）としての生活を共有し、振り返りあう教職仲間「コーホート」と共に、一生をかけて、自らの教員としての資質能力を磨き続け、教職実践課題の解決力や省察力を高め続けようとする教員を育てたいのである。

そこで、本プログラムでは、若年教員や教職志望学生の自主性、自発性を育て、「与えられる研修」から「自ら学ぶ研修」へ高める仲間意識の醸成に努め支援してきた。

11月より、受講生の提案による「自主研修グループ（aufhebenしようの会）」が設立され、本研修前（12：00～13：30）、同会場で自主的・自発的研修が行われるようになった。本研修でもまだ研修や交流の時間や機会が足りないという意識から発生した動きであるが、毎回テーマを設定し、自らの取組の成果と課題をレポートとして持ち寄り、意見交換等を行っている。

この自主研修会のテーマとして希望が多かったものを順に示す。本研修でも取り上げている内容が多いが、若年教員の研修ニーズを反映していると考えている。

- | |
|---|
| ①学年、教科等を指定しての模擬授業 ②学校現場以外の教養的内容 ③学級経営の情報交流、実践例交換 ④保護者対応についての事例交流 ⑤特別支援教育（障害種別に応じた）の研修 ⑥生徒指導（問題行動対応、不登校対応）の実際 ⑦事務処理の仕方 |
|---|

運営スタッフも、午前からの会場提供、研修での臨機応変な支援、求めに応じての助言、本研修での全体への復伝や大学教員等との接続等を行っている。

また、早めに来場し、昼食を摂りながら受講者同士のネットワークづくりをする者、近況報告を兼ね大学教員と交流する者等も増加し、それぞれの活動が研修として機能していくように配慮している。



4. 既存の「ちゃぶ台」教職研修プログラムを活用した体験・省察型研修の実際

【保育ボランティアを連携して】

①趣旨

若年教員と教員志望学生等が、保育所や幼稚園での保育ボランティアを行うことをとおして、保育の現状と課題、保育に関する知識や技能や幼・保・小連携の在り方等を学ぶとともに、「教員としての資質能力」の向上を図る。

②開催日時 平成22年10月18日～平成23年1月14日の間

③実施場所 愛児園平川保育所、山口市立平川幼稚園、吉敷愛児園おひとり保育園、山口市立吉敷幼稚園、Y I C多々良幼稚園

④研修内容等

各園での保育活動補助、園行事等の補助、特別な教育的支援を必要とする幼児の支援、その他園長等の必要に応じた活動等

⑤実践の成果と課題（参加者、受講者、担当者の感想から）

- ・ 園・所のきめ細かい教育活動の具体を実感するとともに、体全体で体験することによって生まれる感動、発見や新たな疑問は、次の活動への意欲に結びついた。
- ・ 幼児の年齢により思考の仕方や社会性の発達の方に違いがあることを行動観察の中から具体的に理解し、遊びの援助など幼児への適切な対応に心がけるようになった。
- ・ ボランティア同士が、お互いを認め合い、助け合い、協力しながら活動する姿が見られるようになり、相互の人間関係を深めることの大切さを知った。
- ・ 園・所の先生方の温かい指導や懇切丁寧な対応により、教材の作り方や活用の仕方等幼児教育の実践的な知識技能を身につけることができた。また、職場の良好な人間関係づくりの大切さに気づいた。
- ・ 幼児にとってはたくさんの人との関わりができる貴重な時間であった。
- ・ 幼児の指導について自信が持てず不安になっていたり、自ら考えた活動を実践してみたい気持ちを持っている学生がいる。そこで今後は、参加者同士の情報交換を増やす等、研修ニーズの把握に努めることが大切である。
- ・ 教育実習で幼稚園しか行かない者が多い現状から、保育園実習の必要性を感じる。
- ・ 保育士という仕事は子どもがかわいいというだけでは務まらないと感じる。体力も精神力も必要であるし、様々な場面に応じた対応のスキルも大切だと思える。自分自身、保育を甘く見ていたと思う。今まで保育士の立場から保育というものを体験する機会と場がなかったことも要因と考えた。
- ・ 自閉症の子どもたちに対する教員や保育士の対応、創意工夫を学んだ。おむつを替えたり、ご飯を食べさせたりする経験も良かった。



【山口大学・生雲小学校フレンドシップ事業と連携して】

①趣旨

本事業は「学校現場で直接体験」をモットーに、①支援者として、②学習者として、③参観者として教職体験に取り組み、教員としての資質能力や実践的指導力の向上を図るものである。受講者は、その学生支援員の実地での指導や取組に助言や支援を行うことにより、自らの実践を振り返り、課題解決に向かう力をつけることを目的にしている。

①実施期間 平成22年5月～平成23年3月

②実施場所 山口市立生雲小学校、生雲地区

③研修の実際

- ・ 代表者会議

事業の実施計画、予算、運営上の問題点等について協議を行った

・連絡会

校長や担当者からの話の後、担当学年の決定や参加日程、参加方法などについて協議し、メーリングリストや連絡網等も作成した。

・紹介式、座談会

紹介式は、参加学生と児童とが対面する場であり、学生は、それぞれ趣味や特技、似顔絵などを描いたカードを用意し自己紹介をした。学生作成のカードは、年間を通して生雲小学校の廊下に掲示された。座談会は、全体会と学年会に分かれ、学生と教員との相互理解を深める場である。教員、保護者とともに田植えも実施した。

・稲刈り、座談会

子どもたちや教員、保護者とともに植えて育ててきた米を収穫する行事を行い、後日、収穫した米で餅をつき、収穫祭を行った。児童の出し物、学生の劇も披露された。

・座談会、代表者会議

運営上の問題点、予算の執行、学生募集プレゼンテーションの内容を協議した。

・次年度学生プレゼンテーション

次年度学生募集のためのプレゼンテーションを行った。

・IYFP終了式

これまでの「感謝状授与式」から「IYFP終了式」と名称、内容を変更し開催された。校長から記念品が手渡された。また、30回超の学生にも賞状が与えられた。学生一人一人が感想や学んだことについて述べ、児童代表から感謝の言葉があった。

④研修の成果と課題（参加者、受講者、担当者の感想から）

- ・ 担任教師一人での一斉指導では、自ずと限界がある。学生が担任と協力し、きめ細かく個に応じた指導をする支援を行ったために、子どもたちは分かる喜び、学ぶ楽しさを実感することができた。
- ・ 授業中だけでなく、ともに遊び、語り合うなど、常に学生が児童と接していたために、学生と児童との間に教員とはひと味違う人間関係が生まれた。また、学生が担任の気付かない児童の人間関係に気付く場合もあり、児童相互の人間関係を深める役割も果たした。
- ・ 学生が授業に参加するため、より充実した授業づくりを心がけるようになり、教材研究、児童の実態把握等に真剣に取り組むようになった。校内研修等においても、学生の述べる意見が新鮮に受け止められ、研修の活性化に寄与している。
- ・ 学生が参加することにより、田植えや稲刈り、運動会などの行事が、力を合わせてスムーズに行えるようになった。また、学生の存在が教員間の人間関係を円滑にし、教員相互で話し合ったり協力し合ったりすることが増えた。
- ・ 学生からの児童についての報告や連絡、相談等により、教員が気付かなかった児童相互の人間関係に気付くことができ、教員の児童理解が深まった。
- ・ 学生は、一年を通して「教師という仕事とは」について考えることになる。児童理解や授業づくり、児童や保護者との人間関係づくりなど、その大変さ、そしてすばらしさについて、生きた学びを得ることができた。



【ちゃぶ台林間学校と連携して】

①趣旨

ちゃぶ台林間学校（「ちゃぶ林」）は、平成17年度より国立山口徳地青少年自然の家（以下、「自然の家」）との共催事業として実施されている林間学校型実践的指導力向上プログラムである。「ちゃぶ林」の目的は、子ども理解、集団生活指導、学びづくり、学習指導など様々な教育的課題を持った教員志望学生（大学生）が、異なった小学校から参加する小学生集団を対象に、宿泊を伴う子どもたちとの交流を通じて子ども理解を深め、体験学習法を利活用した「ちゃぶ林」の活動や学びを立案し実践することによって、教職に関する資質能力（子ども理解力、集団生活の指導力、学習・活動立案力、実践的指導力、教職に対する情熱、企画計画力・課題解決力、保護者や他組織メンバーとのコミュニケーション能力、同僚性や協働性など）を向上させることである。

②実施期間 平成22年8月～平成23年3月（夏・秋・春 計5泊6日）

③開催場所 国立山口徳地青少年自然の家（山口市徳地船路668）

④研修の特徴

「ちゃぶ林」の特徴は次の5つにまとめられる（図1参照）。

(1) 同じ対象場（「ちゃぶ林」）における各年代に対する異なった学びの機会の提供

「ちゃぶ林」は、小学生及び小学生を指導する大学生に学びを提供するプログラムであるが、平成19年度からは、山口県内で活躍している新任教員（臨採含む）に大学生指導と卒後研修の場として本プログラムを提供している（「若手教員研修会」の実施、コーホート研修会との連携）。同様に、教員養成学部への進学を検討している高校生を対象に、活動する大学生を支援する役割を担う「ちゃぶ林」サポーターとしての学びの場を提供している（誠英高等学校、慶進高等学校との連携）。このように本事業は、大学生や小学生ばかりではなく、新任教員、高校生、さらに、保護者（保護者向け説明会・報告会、保護者研修会）や我々指導スタッフなど各年代に対して学びの場、研修の場を提供するプログラムとなっている。

(2) 多様な組織に所属するメンバーによる指導・支援

「ちゃぶ林」では、附属学校園教員と学部教員のみならず、共催である「自然の家」の専門職員（山口，広島，福岡県教委との交流人事教員）、県内の学校教員がスタッフとして連携して学生指導にあたっている。

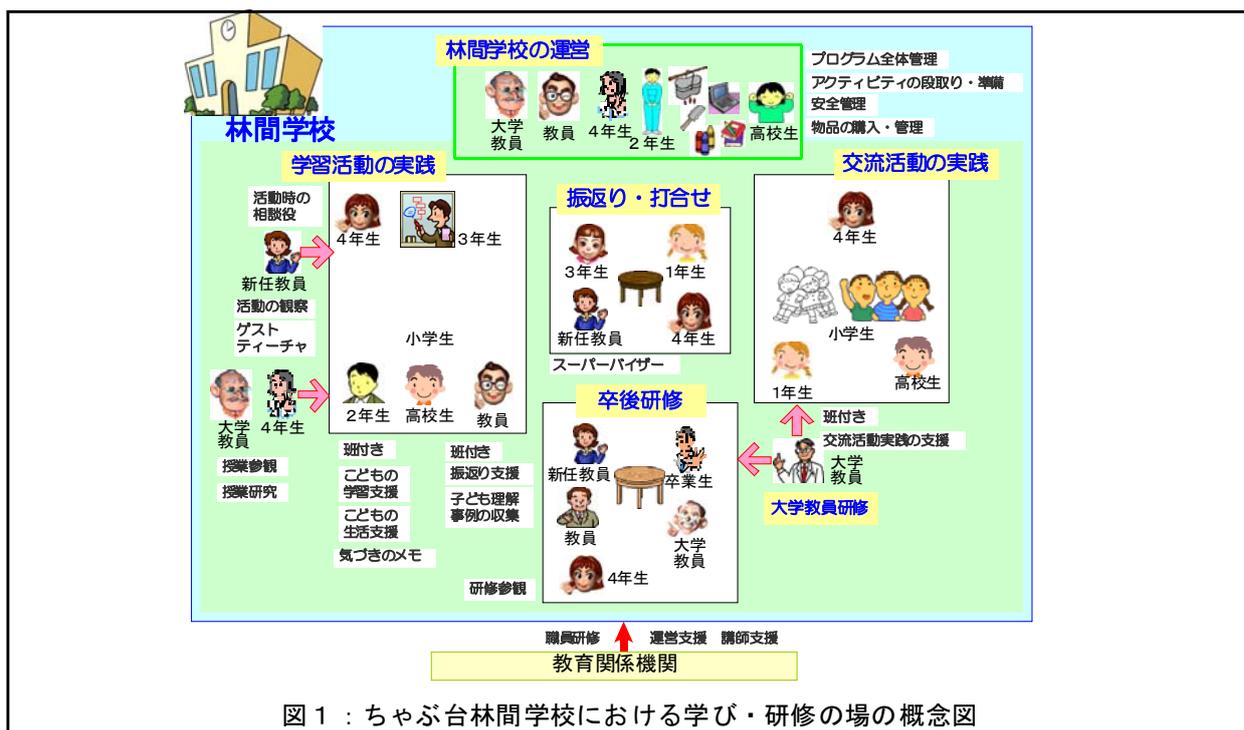


図1：ちゃぶ台林間学校における学び・研修の場の概念図

また、「ちゃぶ林」の運営や生活・学習指導に対して、保護者から保護者報告会やメール等によってコメントや気づきを頂いている。

(3)協働的な活動・学びづくりを通した自己の成長と他者との関係性構築

「ちゃぶ林」では、活動・学びづくりを班単位（2・3年生班と4・5・6年生）で協働して作成している。各自の教職に関するハードルを仲間と協働し、その協働プロセスで生じる様々な問題を適宜指導スタッフの支援を受けながら解決していきながら他者との関係性構築経験を蓄積し、同僚性や協働性が確立する良さを見出し自己の成長への結びつけることを目指している。

(4)子どもたちに対する本物の体験やその体験を通した学びの提供

「ちゃぶ林」が子どもたちに提供する学習内容のキーワードは「本物の体験やその体験を通した学び」である。本プログラムでは、「自然の家」やその周辺地域の自然や農産物、さらには山口県における様々な諸問題・課題等を題材にして、子どもたちに本物に出会わせ、体験・経験から振り返りの学びを目指している。例えば、平成18年度そして平成21年度の「春のちゃぶ林」では、4・5・6年生に対して、徳地の特産である「シイタケ」を題材にした「国産と外国産の違い」、「シイタケ生産者の思い」、「シイタケの菌打ち・収穫作業」などの学習活動を行った。平成19年度の「春のちゃぶ林」には、山口県の「オカラ」問題を題材にして「山口県の取り組み」、「豆腐工場社長さんの思い」、「オカラ料理作業」などの学習活動等を実施してきている。また、2・3年生に対しても秋や春の「自然の家」の自然物を題材として取り扱ったり、平成20年度には「ちゃぶ林卒業生の結婚式」を計画し実施してきている。

(5) 3回の「ちゃぶ林」各々学習課題の設定と事前踏査や学習機会の提供

3回の「ちゃぶ林」では、その年の大学生の教職関係のレベルにも依存するが、指導スタッフ内に学習課題を設定している。「夏のちゃぶ林(2泊3日)」では、子ども個人としての動きや集団としての動き、さらに子どもとの関わりを通して子ども理解を磨く段階と位置付けている。「秋のちゃぶ林(1泊2日)」では、子ども同士の関わりを踏まえた集団生活の指導力を磨き、決められた活動・学習内容のなかで大学生なりの工夫を行うことを目指している。さらに、「春のちゃぶ林(2泊3日)」では、大学生たち自身で活動・学習づくりを行っていく段階と位置付けている。また、各「ちゃぶ林」では、準備段階において事前踏査や研修会（「アイスブレイキング」「体験学習法」「救命講習会」等）を実施している。

⑤研修の特徴（22年度の活動概要）

(1)本年度の事業概要と活動実績

本年度の「ちゃぶ林」の活動内容及び参加者数を表1に示す。本年度は3回の「ちゃぶ林」を実施した。「秋のちゃぶ林」の大学生参加者は多かったが、「春のちゃぶ林」は活動・学習づくりを通して総仕上げと位置付けられるにもかかわらず、春休みが長期休みになること、また「秋のちゃぶ林」の準備・実施が大変であったこと等が要因となり、大学生の参加者数が少なくなっている。

表1：H22年度ちゃぶ林間学校の各回における参加者数

[活動名]	[参加者数]				
	小学生	高校生	大学生	スタッフ	卒業生等
夏のちゃぶ林間学校 (H22. 8/29-30)	46	7	26	12	6
秋のちゃぶ林間学校 (H22. 11/20-21)	47	7	46	9	2
春のちゃぶ林間学校 (H23. 3/26-28)	37	5	15	6	5

(2) 本年度の取組の実際

①夏のちゃぶ台林間学校（H22年8月29日～8月30日）

「夏休み最後の楽しい体験活動」をテーマに実施された「夏のちゃぶ林」では、『子どもと関わることによって、子どもの考え方、振舞いや発言、行動の仕方について理解を深めること』を大学生の学習課題とした。初日の午前は、2・3年班、4・5・6年班ともに仲間づくりへ向けてアイスブレイキングを行い、午後と夜の活動では、夏祭りの準備（担当ブース・ローテーション決め、担当ブースの費用検討、制作等）を行った。4・5・6年班の担当ブース決めでは、話し合いのなかで調整が上手にできなかった班が存在した。2日目には、ちゃぶ林夏祭り（2・3年担当：金魚すくい、ボール入れ、4・5・6年担当：射的、かき氷、わたがし、ヨーヨー、教員チーム：ポップコーン）を行い、大学に戻った後、保護者報告会と絵日記・感想文作成を行った。また、「夏ちゃぶ林」では「若手教員研修会」を開催し、現職の若手教員、4年生学生、指導スタッフとの話し合いを行った。



写真：若手教員研修会の様子



写真：夏祭りの様子



写真：130人で集合写真！

②秋のちゃぶ台林間学校（H22年11月20日～11月21日）

「仲間とともに秋を満喫しよう！」をテーマに実施された「秋のちゃぶ林」では、『発問、課題の与え方、作業時の子どもの反応（つぶやきや質問、作業の状況等）を注意深く観察（メモをとることを含む）し、個人・他者とともに振り返ることを通して、課題設定・発問の仕方、作業時の声かけについて理解を深めること』、『子どもとの関わりから、子どもの考え方、振舞いや発言、行動の仕方について理解を深めること』を大学生の学習課題とした。子どもたちは「秋」を題材にした協働活動をとってお互いの絆を深めていくべく、2・3年生班は、初日に自然物を利用した服の制作を行い、夜の活動でファッションショーの映像を見て見通しを持つ導入を行い、2日目にファッションショーを開催し、お互いの服の良い所さがしを行った。また4・5・6年班は、食事や栄養を題材に、初日は昼食・夕食の振り返りや栄養の導入活動を行い、夜にはおやつのお話を導入として扱い、2日目にはヤキイモづくりを行った。大学に戻った後、保護者報告会と小学6年生と大学4年生の卒業式（卒業証書の授与）を行った。



写真：ちゃぶコレの準備の様子



写真：ヤキイモの様子



写真：4年生への卒業証書授与

③春のちゃぶ台林間学校（H23年3月26日～3月28日）

「春のちゃぶ林」では、「徳地の春をみんなで楽しもう！」をテーマに、大学生は活動・学びづくりを学習課題とした。今回の「春のちゃぶ林」は2・3年班、4・5年班同様の題材でねらいをかえることに挑戦した。初日の春探しのウォークラリーと天体観測、2日目の野外炊飯と日暮ヶ岳登山は両班同じように活動を展開した。3日目には、2・3年班はお花見、4・5年班は保護者への3日間の活動報告をするための資料・発表づくりを行った。大学に戻った後、保護者報告会と4・5年班による活動発表が行われた。



写真：牛井で総決起集会(?)



写真：お花見の活動



写真：「春ちゃぶ林」の振り返り会

(3) 今後の課題

学年班を中心に活動を行う「ちゃぶ林」において、当然のことながら、学生の課題意識や「ちゃぶ林」への関わり方、教職力レベルが異なるため、学生全体としてどのような学習課題を設定するのか、各学生にどのようなことを経験させて育てるのか等に関してスタッフ間で共有することが重要であり、そのためのスタッフ間コミュニケーションの機会を増やすことが必要である。

Ⅲ 連携による研修の成果と課題

1. プログラム参加者の現況

本年度の本プログラム登録者数は表2のとおりであった。

若年教員（本務者）は、県内学校・園勤務者に限らず、千葉、神奈川、滋賀、大阪、兵庫、広島、愛媛、福岡の府県に広がった。約半数は本学部卒業生であるが、山口県教育委員会や本学・学部のWebページを見て申し込んできた他大学出身の教員も増え、県外から新幹線で来県し、研修会後の交流会への参加、宿泊する者も多い。校種別には、高等学校教員が増加した。小中学校に比べ校内外での研修機会が少ない現状を反映していると思われる。また児童養護施設や福祉施設職員の参加もあり、教育と福祉両面の知識やスキルを有して日々の業務にあたりたいという意識の現れと見ている。

若年教員（臨時的任用教員）は、県内学校・園勤務者がほとんどであるが、ここでも高等学校教員が増加している。

教職志望学生は、本学では教育、人文、経済、理学部生が受講した。その他、県内教員養成系私立大学や県外国立大学教育学部、教員養成系私立大学から参加があった。彼らは山口県教育委員会Webページを見て申し込んだ者と山口県教育委員会「採用前研修講座」受講時に知り申し込んだ学生である。

また、特に広島地域の受講者（本務者、学生）が増えてきており、来年度以降、「ちゃぶ台次世代コーホート広島県支部（仮称）」の設立に向け、現在調整中である。

表2 プログラム参加登録者数一覧

現在の勤務校等	性	小学校	中学校	高等学校	特別支援	幼稚園	その他	計
本務者	男	11	1	3	1	0	1	17
	女	12	5	5	0	2	0	24
臨時的任用教員	男	3	2	1	0	0	1	7
	女	5	3	5	0	0	2	15
若年教員合計	計	31	11	14	1	2	4	63
現在の学部等	性	教育学部	大学院	他学部	県内大学	県外大学	その他	計
教職志望学生	男	4	2	1	0	2	0	9
	女	9	5	6	2	4	0	26
学生合計	計	13	7	7	2	6	0	35
受講者合計	計	若年教員（男24・女39） 学生（男9・女26） 計（男33・女65） 計98人						

2. プログラム開発の成果

本プログラム2年間の取組の中で、教員の養成・採用・研修を結ぶ事業展開や若年教員による連帯感溢れる「教職学びの仲間集団」づくりの重要性を認識することができた。本プログラム提案の採択、主任指導主事様の研修事業への派遣、指導助言や物心両面にわたる格段のご高配等を賜った（独）教員研修センターに心から感謝の意を表するものである。以下、成果をまとめる。

(1) 本プログラムの有効性、「ピア・サポート」の重要性を認識することができた

プログラム終了後に実施した「受講者のプログラム満足度アンケート」の結果を数値とグラフで示す（%表示：表3、図9）。このように受講者からは概ね高い評価を得ており、特に本務者と学生の満足度が高い。グラフもほぼ同じ形を見せている。

しかし、「大いに役立つ」が際だつ「学生」と「本務者」では、求めるものが違うのではないかと考え、3プログラムで整理したグラフが図10～12である。



表3 プログラムの満足度

	学生	臨時任用教員	本務者
大いに役立つ	65	47	73
かなり役立つ	32	47	27
どちらとも	2	6	0
あまり役立たない	1	0	0
役立たない	0	0	0

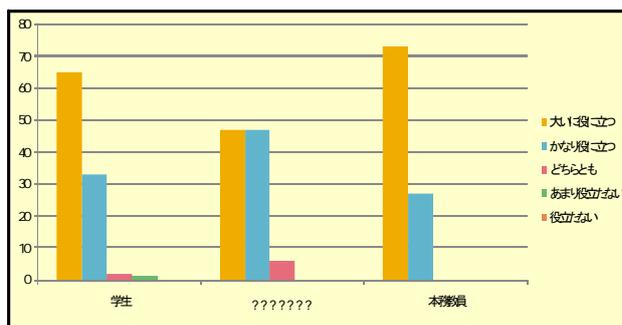


図9 プログラムの満足度グラフ

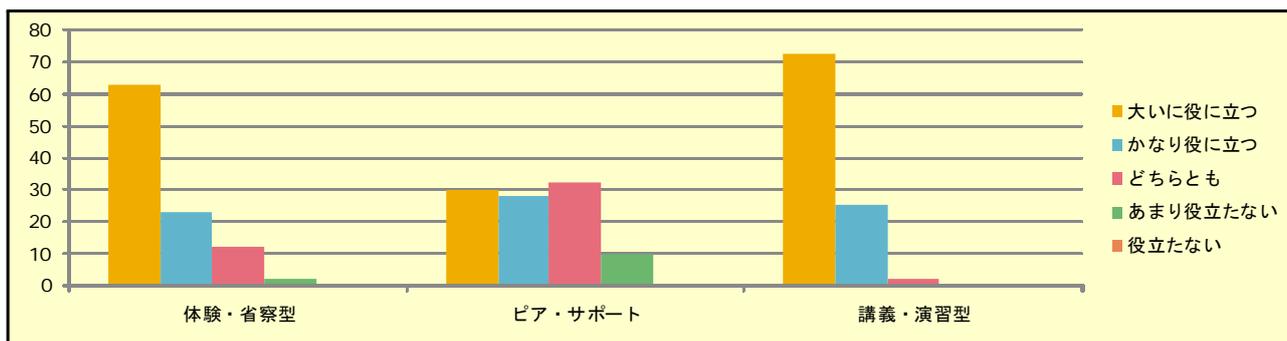


図10 各プログラム別の満足度（教職志望学生）

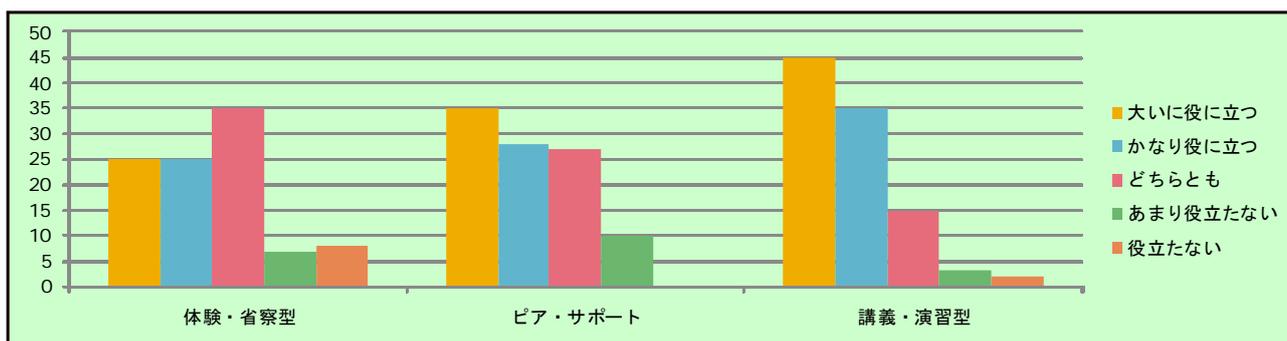


図11 各プログラム別の満足度（臨時的任用教員）

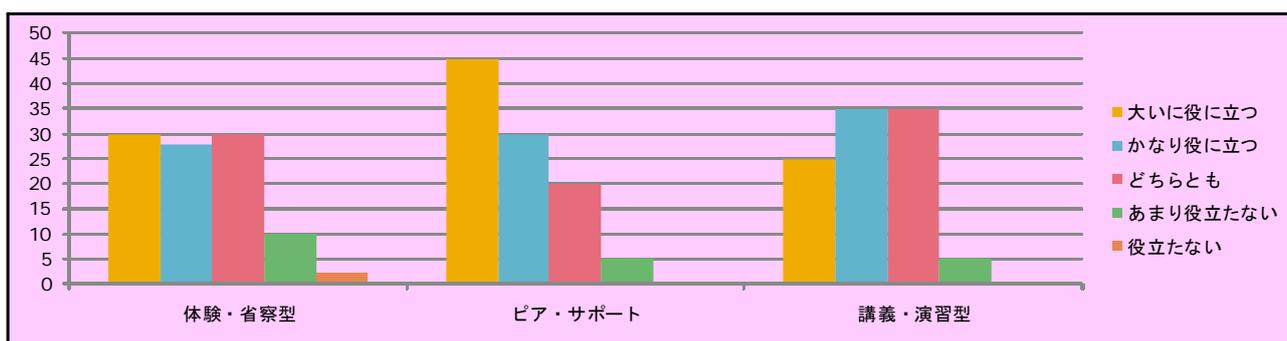


図12 各プログラム別の満足度（本務者）

「学生」にとっては、外部講師や指導者から「教えてもらう講義・演習型」と、自らが子どもたちを指導体験し「現職教員等にそのあり方を指導助言してもらえる体験・省察型」研修の満足度が圧倒的に高いことを示している。学内等で一緒に過ごすことの多い仲間たちとの「ピア・サポート」に対する要求はそれほど強くないと考えられる。

しかし「本務者」にとっては、講師や指導者による「講義・演習」や後輩たちを塩津助言しながらの「体験・省察」にも概ね満足しているものの、同じ教職仲間との「語り合い、認

め合い、支え合い、励まし合い等のあるピア・サポート」を強く求めていることが分かる。
そのことは、この「ちゃぶ台次世代コーホートへの期待をキーワードで示す」よう求めた問いに対する回答にも見ることができた。

----- 学生のキーワード -----

・教育の現状理解 ・経験の吸収 ・実践的スキルの獲得 ・現場教員との交流 ・自身の向上
・教職を目指す仲間 ・授業の補充 ・意欲の向上 ・目標とできる人たち

----- 本務者のキーワード -----

・同世代の教員、同志、仲間との交流 ・悩みや不安の共有 ・実践を学ぶ ・視野を広げる
・モチベーションを高める ・資質向上 ・自己の振り返り ・学び直し ・原点の再認識
・他校種、他教科との交流

本プログラムでは、同年代ならではの共感的理解、悩みの共有や支持的、肯定的な助言等による若年教員の不安解消が必要なことを再認識できた。また、高度な教育研究、教員養成や教員研修支援等の地域貢献機能を有する教員養成系大学が、自ら有する知見やネットワークを総動員し、若年教員が共に学び合え高まり合える学びの共同体を創り上げることにより現状を打開できる可能性を感じる事ができた。

今後も、本プログラムの全国各地の大学への広がりや、学校や教育委員会との連携強化に努めていく所存である。

(2) 研修参加階層の研修ニーズ把握と取り込みに改善が見えた

本プログラム登録者や在籍学校教員等の協力により、校種別研修ニーズの把握を行い、研修内容に組み込んだことは大きな成果であった。各校種別の上位から5項目を挙げる。

----- 研修ニーズ -----

① 幼稚園・小学校

1) 学級経営・集団づくり 2) 学習指導の技術 3) 学習指導の形態 4) 学習の動機づけ
5) 社会人としてのマナー・あり方

② 中学校

1) 自己学習の力 2) 特別支援教育 3) 社会人としてのマナー・あり方 4) 子ども理解
5) 人間関係づくり

③ 高等学校

1) 学級経営・集団づくり 2) 集団づくり 3) 自己学習の力 4) 学習の動機づけ
2) 進路指導

④ 学生

1) 教員のコミュニケーション力 2) 教材分析・開発、授業構想 3) 教えるための専門的知識・技能
4) 子どもや集団の実態把握 5) 学級経営・集団づくり

教育委員会が行う「初任者研修」や「経験教員研修」等の研修内容は、教員としての資質能力や実践的指導力の向上を図る研修として見事に網羅されている。その上で、大学が行う自主的・自発的研修事業として、研修内容の補充・発展的内容の充実、教育関係以外の講師による全人的素養を高める研修の拡充や生涯学習・社会教育関係団体・機関等と連携した地域教育力の活性化を視点とした研修の導入等による棲み分けが必要と考えられる。

また、研修形態として、受講者の評価が高かった「参加者同士が時間的に余裕をもって話し合え交流しあえる形」、「指導助言等がなく、自分たちで解決の糸口を見つけ出せるよう

な研修」や「学校外の場所」で「少人数」で「本音が出し合える」スタイルを創造していく必要がある。

(3) 自主的、主体的に自らを高める研修集団（仲間）づくりが始まった

本編の「3. 自主的、主体的に自らを高める研修集団づくりの実際」で報告したように、「与えられる研修」から「自ら学ぶ研修」へ高める仲間意識の醸成と具体化が図れたことは大きな成果と考えている。来年度以降、研修集団の拡充に努める。

(4) 山口県教育委員会・山口市教育委員会との連携協力が強固なものとなった

特に、山口県教育委員会・山口市教育委員会とは、カリキュラム作成、講師選定、広報周知や対市町教育委員会・対学校の連絡調整等に向けた緊密な連携が進展した。教員の養成・採用・研修の一体化に向けた機運が醸成できたと考えている。この経験を活かしながら、今後の取組を進めていきたい。

IV おわりに

教育雑誌「SYNAPSE」（2011.3「ジアース教育新社」）への拙稿（霜川正幸）から。

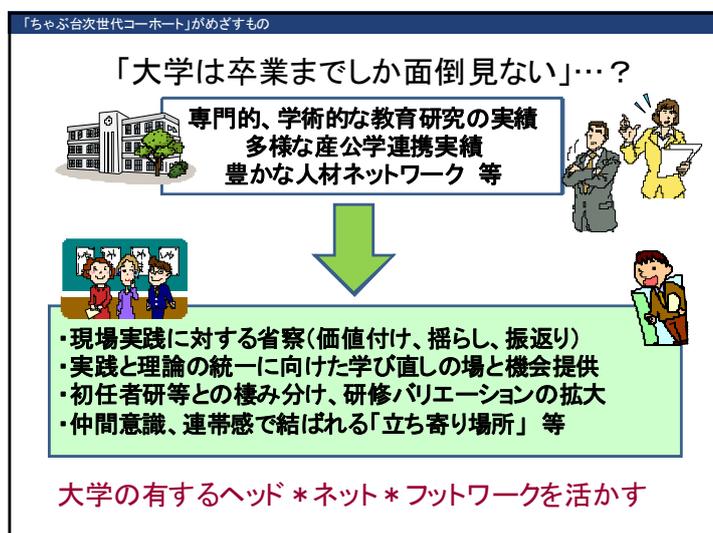
....本プログラムへの参加理由について答えた受講者の声を紹介する。「コーホートは私にとって『帰る場所』であり、『原点に戻って自分を見つめ直せる場所』、そして『教師としてのモチベーションを高めてくれる場所』です。参加する度に新たな人との出会いがあり、会いたい人に会え、尊敬する人たちから日々の業務で忘れがちな何かを思い出させて貰える場所です。（高校：正規教員1年目）」、「新卒の私にとっては、教職について迷うこと、分からないことがたくさんあります。ただ、知識やすぐに使えるワザなどは教育雑誌や他の研修会でいくらかでも仕入れることができます。例えそれが本当に使えるモノであったとしても、今の私には空虚なモノのように感じます。私が今求めているものは、そういった使えるモノではなく、困ったときや迷ったときに立ち返ることができる『原点』です。その『原点』がこのコーホートで研修されている若い先生方とのつながりや議論、また大学の先生方、学生や講師の方々の経験や考え方に詰まっているから来たくなるのだろうと思っています。（小学校：正規教員1年目）」

「ちやぶ台次世代コーホート」は、若年教員や学生の自主的、自発的な研修事業である。参加者はもともと教育事象への興味関心や研修意欲が高く、教職に真剣に立ち向かっている者が多い。教員としての資質能力の素地ができてきている者が多いとも言える。しかし、そんな彼らもまた、日々悩み苦しみ、失敗と挫折を繰り返しながら教壇に立っている。

「大学は卒業までしか面倒見ない」との声が有る。しかし、本学部は、彼らの真摯な思いや地道な努力を受けとめ、教育実践を正しく価値付け背中を押してやるとともに、日々の振り返りや学び直しの機会と場を与えてやりたいと考えている。

また、共に歩む仲間の存在を感じさせ、連帯感のある若年教員集団を育てていきたいとも考えている。

そして、彼らの成長する様子を学生にも見せながら、教員養成と研修をつなぎ、次代の教育を担う教員を育てていく所存である。....



V その他

- [キーワード] 若年教員、臨時的任用教員、教職志望学生、協働型教職研修、共有と省察、実践上の不安・悩み、ピア・サポート、連携
- [人数規模] D. 51名以上 (補足事項 登録者数98、延べ参加者数295)
- [研修日数(回数)] D. 11日以上 (補足事項 ちゃぶ台次世代コーホート 6回
体験・省察型研修 6回)
林間学校、保育ボランティア、フレンドシップ等
- [研究分担者等] 研究代表：古賀和利 (山口大学教育学部 学部長・教授)
研究担当：霜川正幸 (山口大学教育学部・准教授・ちゃぶ台研修部長)
研究分担：村上清文 (山口大学教育学部・副学部長・教授)
鷹岡 亮 (山口大学教育学部・准教授)
長谷川裕 (山口大学教育学部・准教授)
研究協力：中村哲夫 (山口大学教育学部・特命教授)
佐伯里英子 (山口大学教育学部・客員准教授)
久保田尚子 (山口大学教育学部・職員)
林 弘美 (山口大学教育学部・職員)
連携協力 山口大学教育学部附属学校・園(山口小学校、光小学校、山口中学校、光中学校、特別支援学校、幼稚園)連携等担当者
山口大学教育学部附属教育実践総合センター
- 【問い合わせ先】 山口大学教育学部 霜川正幸
〒753-8513 山口県山口市大字吉田1677-1
TEL&FAX：083-933-5458 E-mail：m-shimo@yamaguchi-u.ac.jp
- 山口県教育庁教職員課 大塚泰二
〒753-8513 山口県山口市滝町1-1-1
TEL&FAX：083-933-4550 E-mail：a50200@pref.yamaguchi.lg.jp
- 山口市教育委員会学校教育課 縄中宏明
〒753-8513 山口県山口市中央5丁目14-22
TEL&FAX：083-934-2862 E-mail：gakko@city.yamaguchi.lg.jp